

今号は、2009年度の初頭を飾るに相応しい、大変すばらしい内容の論文が満載されている。まずは、『扉』の井上 亨教授の「Mickey のつぶやき」は、われわれのような医学教育職に就いている者にとっては考えさせられる内容であった。毎年、4月には、生命の本質を探究し、生命を救う手段を学ぶという崇高な気概を持って多くの医学部1年生が大学の門をくぐる。その医学教育の現場は、はたして彼らの理想に十分応えているであろうか。現行の研修医制度の中で、かなりの研修医が自分の進路にさまざまな不安を抱いていると聞く。理想とする指導医と巡り会えたり、自分の抱いた夢や希望を叶える方策を見出せる者は少数であり、むしろ研修医の多くは、日常の医療業務に忙殺され、考える暇もないと聞いている。さらには医療訴訟等の医療現場に吹き荒れる嵐の中で、医学生のに抱いていた高い理想はいつしか現実のなかに埋もれ、目先のことにばかり捕われて研修生活を過ごしていないだろうか。医学生の講義や実習を受けるときのあの純粋で美しい眼差しを前に、教育者はいつしか熱くなる。その純粋さを失わずに、気概に燃える若き医師を養成するために、今なすべきことは何か。さまざまな思いが脳裏を過った。

『総説』の下田雅美先生の「MRI firstによる頭痛診断」は、日常診療で頻繁に遭遇する「頭痛」を主訴とする症例に対して、MRIを画像診断として第一選択とする施設が増えている現状を鑑みて企画された。すなわち、MRI firstで検査したがゆえに異常所見と混同しやすい正常変異や、頭痛の誘因として決して見落とすはならないSAHとMRI上鑑別すべき疾患等を、自らが経験したMRI所見を中心に解説している。内容は、単に鑑別のポイントを示すばかりではなく、各疾患ごとに病態や治療法にまで言及しており、日常の診療にすぐにでも役立つような配慮がされている。

『手術手技』の川原信隆教授の「側頭骨悪性腫瘍に対する手術」は、側頭骨悪性腫瘍の亜全摘出手術手技について、わかりやすいイラストと実際の手術現場での術野の写真を織り交ぜて明解に解説されている。最近では、evidence中心の医療や低侵襲手術の広まりにより、このような手術に消極的になる施設が増えていく現状において、改めて脳神経外科医に対し、本手術手技の意義を投げかける内容である。

また、今回の『脳神経外科疾患治療のスタンダード』には、森田明夫先生の「未破裂脳動脈瘤の治療—脳ドックのガイドライン2008を中心に」が掲載されている。この論文では、現在脳ドックなどの普及に伴い発見症例が増加しつつある、未破裂脳動脈瘤の治療方針について詳述されている。その中でも、治療方針決定のために最も重要な事項として挙げられているのが、医師と患者間のリスクコミュニケーションの構築であり、そのために必要な基準が、今回のガイドラインで「推奨」というかたちで、各項ごとに簡潔明瞭にまとめられている。このガイドラインに準拠して、患者さんへ説明することにより、不測の事態が発生した場合のトラブルの発生を最小限にできるような配慮がされている。

その他、研究論文、症例報告も、脳血管障害、脳腫瘍、感染症など多岐にわたっており、読者を引きつける内容である。

読者が本号を大いに活用し、日常の診療に少しでも役立てていただくことを祈念している。